

社会科 学習指導案

上園 悦史（授業者）

2

授業実践の記録と分析

社会

1. 基本情報

- ・日時：2016（平成28）年6月17日（金） 第5校時（50分）13：50～14：40
- ・場所：東京学芸大学附属竹早中学校 グループ学習室
- ・学年：第1学年C組 40名（男子20名、女子20名）

2. 単元名（題材名）：「統合を強めるヨーロッパの国々」（地理的分野）

3. 単元について

3.1 単元の特性（単元設定の理由）

(1) 教科からみた特性

EUについての学習は本単元の学習内容の中核をなしている。生徒の関心が比較的高い地域で、国家間の結びつき・統合を強めていることについて、しばしば報道もされており、生徒の知的好奇心をそそりやすい。現在、社会問題化しているシリアなど中東からの難民問題をきっかけに、「EU」と「シェンゲン協定」が注目されている。EUは不法な経済移民は受け入れないものの、戦火を逃れてきた難民は受け入れ、それを域内各国で均等に分担する構想を掲げてきた。その最大の分担国は100万人を超える難民が流れ込んだドイツである。難民問題についてはEUの加盟国内でも対応に差があり、ドイツでさえ移民排斥運動が台頭している。また中・東欧諸国の中にはEUに対して難民政策の見直しを求めていく動きもあり、セルビアとの国境を封鎖したハンガリーの政策もこの流れと一致する。国境の審査をなくし、ヒトやモノの移動を流動化させることで経済的な利益を優先させてきたEUであるが、国境封鎖という実力行使に踏み切る事態が増加・長期化することは欧州統合に逆行するだけでなく、経済的な損失も大きい。これまで結束を維持してきたEUが難民問題に直面して危機を迎えているといえる。また、人道的な問題への対応についてのジレンマは、生徒の感性に訴えやすく、また、他人事ではいられない問題であり、その対応のあり方を多面的に考えることの重要性をとらえさせやすい。

(2) 汎用的スキルや態度・価値の育成の観点からみた特性

- ・汎用的スキル（批判的思考力、協働する力）

国家を超えた結びつきをなぜ強めようというのか、島国の日本ではわかりづらいことである反面、国家間協力は魅力的にさえ映る。しかも、今日、難民問題への対応などその存在価値が問われる問題に直面し、意見が割れている。その意味で国家間統合について批判的に考察させやすい。

そもそもこうした意見が対立している問題を取り上げることは、双方の意見に耳を傾け、自分なりの考えを多面的・多角的に捉える必要性を実感させやすい。生徒の間でも意見が割れることが予想され、それをどう調整していったらよいか考えるきっかけにもなり得る。

- ・態度・価値（他者に対する受容・共感・敬意、好奇心・探究心、より良い社会への意識）

EUについては様々な立場・意見が混在している。そうした多様な意見や価値観に直面させることは民主主義的に決めることを学ぶ良い機会ともいえる。

難民問題は、報道も多く、人道的な問題で、生徒の探究心を高めやすいし、当事者意識をもって社会の在り方を考える機会となりやすい。（難民受け入れを拒む意見がなぜ支持されるのか、非人道的に映る政策をなぜとるのか、そのジレンマを取り上げる教育的意義は大きい）

3.2 単元の目標

(1) 社会科固有の単元目標

- ・ヨーロッパ州が一つになろうとする過程を学習することにより、ヨーロッパ州の地域的特色を歴史

的・政治的・文化的・経済的視点から幅広く考察する。

- ・ EU が抱えている問題を、加盟各国の地域的特色の違いや、難民問題など域外諸国との関係からとらえるとともに、グローバル化するリスクの様相をとらえる。
- ・ 地域統合を強める EU の取り組みについて、リスクと公益性の観点から考察し、より良い社会の実現にむけて自らの価値認識を問い直す。

(2) 汎用的スキルや態度・価値の観点からみた目標

- ・ 地域統合を強める EU について、加盟各国の地域的特色の違いから様々な立場・見解があることを理解したうえで、自分なりの考えを見直す力・態度を養う。
- ・ 様々な民族、地理的・文化的背景を持つ人々・国家がともに共生していく社会を築くためには、違いを尊重し、その価値を認め合う態度が必要であることをとらえる。
- ・ ヨーロッパ州では立場の違いを乗り越えてより良い社会を構築しようとしていることに関心を持ち、他者の意見を共感的に理解しようとする態度を養う。
- ・ ヨーロッパ州で起きている試みや諸問題を、自分たち自身の課題として関心を持ち、これからの社会をより良くしていこうとする態度を養う。

3.3 生徒の実態

全体として活動的で、華やかな雰囲気醸し出す数人の生徒がクラスの牽引役を果たしている。教授内容への興味・関心を素直に表現し、教師の発問に対する発言はもちろん疑問や質問を躊躇無く口にできる生徒も多く、特に発表形式の授業ではそうした積極的な発言や態度を期待したい。

3.4 教材観

EU 加盟国の拡大により、比較的貧しい国から豊かな国へ働きに出る人が増えている。経済活動の自由を推進する西欧諸国にとって、グローバル化の中で競争力を保持するためには、安価な労働力としての移民の存在は不可欠である。しかし、重大な犯罪やテロ事件の発生によって、公共の福祉や安全を脅かす対象として移民の存在が問題視され、「望ましくない移民」の入国を制限し、ひいては国内の移民を排斥する動きが目立ってきている。移民が国家に統合されることが必要とされる一方で、社会の安全を確保するために排除されるという状況が併存していると言える。

近年、紛争地域シリアからの難民流入が増大し、移民問題をさらに困難な状況に陥らせている。欧州最大の受け入れ国ドイツでは、過去 1 年間でシリア人を中心に 100 万人以上の移民が入国を許されているが、最近では国境管理を厳格化し、移民を抑制しようとする欧州の数カ国と同様の措置が取られている。移民政策のジレンマとも言え、その受け入れによる国家の発展および人道的・人権保護の立場から積極的に難民の保護を進めていく立場と、国の利害や感情の対立が生じ、社会的なリスクとして論じられる彼らの存在が国の存在を脅かす脅威として排除しようとする立場との相克である。この問いの答えを見出すことは決して容易ではないが、今回の授業では、難民の保護に対してどうあるべきかという問いを立てることで、難民問題が一部の「ポピュリズム」の格好のターゲットとしてその立場の正当化に利用されている状況を捉えつつ、人道的・人権保障の立場から移民・難民の保護について道徳的な問いを投げかけるものと期待している。

3.5 指導上の工夫（アクティブ・ラーニング活用方法も含む）

本授業では、移民・難民問題に対処しようとするドイツのジレンマの状況を少人数グループで話し合う。このために使用する資料や事前の学習は討論活動を掘り下げたり個々の価値観の違いを露呈させたりして、各生徒の意見の違いをより際立たせるようにする。さらに、グループで話し合った内容をまとめたホワイトボードを全体で概観することにより、自分とは異なる意見や価値観をもつ友達を知り、どうあることが良いことなのか、人としてあるべき姿を探究する。

3.6 単元の評価計画（評価規準・基準，評価方法）

<省略>

3.7 単元の指導計画（全6時間）

時	主な学習活動	教師の指導・評価・留意点
1	・ヨーロッパ州の自然環境の特色 ・民族，宗教，言語の分布と多様性	・ヨーロッパ州の地理的特色を歴史的・民族的・文化的な視点からとらえる。
2	・ヨーロッパ統合の進展による産業の変化 ・域内の自由移動と地域格差	・人や物の流れが活発化し工業が発展したことと地域格差が広がっていることなどをとらえる。
3	・EUの拡大による利点と問題点（ギリシャ支援をめぐる各国の思惑の考察）	・EUの理念に照らしてギリシャ支援のありかたを自分なりの考えにまとめる。
4	・EU 離脱をめぐる国民投票を行うイギリス国内の背景 ・EU 最大の工業国ドイツと外国人労働者 ・ドイツの大都市での外国人排斥運動の高まり	・歴史的な反省から，ドイツでは歴史と真摯に向き合う取り組みが成され，難民を受け入れる素地が大きく開かれていることに気づかせる。 ・外国人支援に使われる負担増などの問題が起きたことや，宗教や文化が異なることに注目させる。
5 本時	・ドイツにおける難民・移民排斥運動の高まり ・難民問題をめぐる EU 各国の思惑や対応の違い（「一つの欧州」の理念の揺らぎ） ・難民問題への対応のありかた	・難民の置かれている立場や境遇に共感し，人道的立場からその解決に向けて取り組むことの必要性を強く意識させる。 ・EU 各国の立場や思惑には違いがあること，問題解決には困難な課題が多いことをとらえる。
6	・難民問題のこれからについての話し合い（日本の難民受け入れのあり方も含む）	・異なる意見や立場を理解し，解決に向けて努力していこうという強い意志を持つとともに，より良い社会を築いていこうという意欲をもたせる。

4. 本時

4.1 本時の目標

1. 難民問題を取り上げたドキュメンタリー番組を視聴し，難民たちの置かれた状況などの事実を把握し，その対応について対立する意見を分類することができる。
2. 難民問題を抱える EU 各国の立場や意見の違いを比較し，グループ内で話し合い，お互いに意見交換をして理解を深めることができる。
3. 最大の難民を受け入れているドイツについて，これまでのドイツの難民問題に対する態度を振り返り，これからどうなることがよいのか，よりよい対応の仕方を考え，自分なりに意見をまとめることができる。

4.2 評価規準

- ・難民問題をめぐって EU 各国の対応の違いがあることをふまえ，その問題の改善にむけて取り組もうとする態度を養う。（関心・意欲・態度）

4.3 前時までの学習者

- ・ギリシャ支援のあり方について，EU の信用を保つという公益性を守るためにはいかなる支援のあり方がよいのか，自分なりの意見をまとめた。
- ・EU の離脱か残留かをめぐって国民投票を行うイギリス国内の背景を理解した。
- ・ドイツは EU 最大の工業国に発展し，地中海沿岸諸国から多くの外国人労働者を受け入れてきたことを踏まえ，移民の力が経済の発展に寄与したことをつかんだ。
- ・ドイツの大都市で外国人が急増し，彼らを排斥する運動が高まっていることを理解した。

4.4 本時の学習活動と教材

欧州の難民危機を報道した写真，ワークシート，映像資料『NHK NEXT スペシャル 密着シリア難民 4000 キロの逃避行』

4.5 準備物

ホワイトボード、DVD プレーヤー、書画カメラ、ワークシート

4.6 本時の学習指導過程

時配	学習内容と活動	指導上の留意点・評価
導入 5分	地中海を決死の覚悟で渡ってくる難民の親子の写真を見てわかることを列挙する。	★ヨーロッパへ流入する難民の置かれた立場に共感する態度をもつことができたか。(命にかかわる急迫の事態)
展開 40分	- 難民が地中海を越えてギリシャから EU 各国へ流入してくる中で、鉄条網を設置するハンガリーに着目し、EU 諸国が難民の対応に苦慮していることを理解する。 - 難民受け入れのメリットとデメリットを考える。 一枚岩ではないドイツ国民 - ドイツの状況を理解する (年間、人口の 1 % にもあたる 80 万人の難民を受け入れることや難民収容施設で発生した暴力事件などからメルケル首相への批判が起きていること)。 - EU がばらばらになる恐れがあること (ドイツのシュタインマイヤー外相) - ヨーロッパを統合するという大きな理想を掲げる EU の中核国としてのドイツが難民の受け入れを続けることがよいのかどうか、グループで意見を出し合う。 - 対立するいくつかの意見を発表し、現段階での最もよいとおもうアイデアをグループで話し合い、結果をホワイトボードに記入する。 8 班のすべての意見を掲示する。	- メリット：道義的な責任、国家としての信用力の向上、将来の貴重な労働力 - デメリット：多額の税金が難民のために使われる、偽装難民がいる、犯罪やテロを助長する - 難民を「問題視」する生徒の見方のなかに、急進的右派勢力の主張や移民排斥運動の主張と共通する意見がみられることも予想される。ただし難民を問題とする視点のなかで、人権を守るという姿勢や人権という価値観を基盤として難民の問題を考察することは、イデオロギーの対立に揺さぶられることなく、人種・民族・宗教の違いを超えた普遍的な価値を守る姿勢を生徒たちに育む機会となることを期待したい。 - 難民の受け入れ体制を整える以前に、発生原因となっているシリアの紛争解決に向けての取り組みが急務であると指摘する声も予想できる。
まとめ 5分	「11 人と 100 万人」という数字を提示し、日本とドイツの難民受け入れ体制の違いに着目する (日本の難民申請のうち 99 % が却下)。 - 日本政府は難民受け入れに非常に厳格であることをとらえる。	★難民問題の解決の難しさを改めて感じ取ることができる。 ★日本政府の対応に注目して、ヨーロッパ州における難民の問題を日本にも引き寄せて考えるきっかけとなったか。